

# 保育学生の造形用具経験に関する研究

—Y短期大学保育学科1・2年生へのアンケート調査を中心に—

難波章人 森下嘉昭

## 1. 課題意識と課題設定

### (1) 課題意識

情報化社会が進み、超スマート社会が到来する中、保育者を目指す養成校の学生たちも多くのデジタル機器を使い、動画やSNSなどで情報を得て生活している。そうした大きな社会変化の中で教育現場でもICTを活用した授業が重要視されている。その一方で、実際に手を使って物を作るための道具については、知識を知っているだけで実際の経験が減ってきている。それは、小学校図画工作科の授業時数減少からも言える。

幼児期においては、手を使いものを作ることで脳と手の連携により、右脳と左脳の活動で脳の発達が促され、手先の微細運動能力も身につく。また、どんな素材で作るとどんなものに仕上がるのかというイメージする想像力が豊かになり、先を見通す力を養うことができる。特に、このような手と道具を用いた造形活動に対する保育者の援助と幼児期の子どもの学びについて、幼稚園教育要領解説では、「例えば、木工の素材とかなづちを用意したとしよう。しかし、それらが置いてあるだけでは、初めて見る幼児は興味をもたないだろう。くぎをうまく打っている幼児を見ることにより、あるいは、教師が打ってみるといふ働き掛けにより、誘われてかなづちを手にするようになる。しかし、そのような姿を見て、やり始めた幼児も、初めのうちは、その幼児なりのやり方しかできないだろう。いろいろ試行錯誤を繰り返すうちに、くぎをうまく打ちつけるにはどうすればよいかを、上手に打っている友達や教師の動きをモデルにしてその動きをまねたり、考えたりしながら、身に付けたり、気付いたりしていく。このような環境との関わりを通して幼児は、自らの手で用具の使い方を獲得し、自らの世界を広げていくことの充実感を味わっていく。」<sup>1)</sup>と記されている。つまり保育者には、子どもが自らの手で用具の使い方を獲得し、自らの世界を広げていくことの充実感を味わっていくことのサポートのための知識や経験

が必要であると言える。さらに、人的環境としての保育者のこのような援助を通して、子どもが試行錯誤して諦めず最後までやり抜くことは、非認知能力の育ちと深く関係している。この非認知能力が、幼児期に養う上で近年重要視されている能力である。このことは幼稚園教育要領の5領域の健康、人間関係、環境、言葉、表現と横断的に関わり総合的に育む力である。

今回の造形用具については、幼児が造形活動を行う上で様々な表現を楽しむ、また、工夫して作ることができるという点において取りあげた。また、道具の基礎的な使い方を習得することで、小学校につながる指導となる。故に、保育者を目指す養成校学生は、幼児期の子どもに対して具体的に指導するための実践的かつ具体的な知識や指導法を、授業を通して学ぶ必要がある。近年現場では様々な発達の問題や障害を持つ幼児も多く、その子に合った適切な指導が求められる。また幼児によって、体験、知識の差も大きく個に応じた指導が必要である。その様な状況で、近年の学生を授業でみる限り、多様な道具についての知識や体験が乏しいと感じる。よって今回、学生にアンケートを取り実態を調査し、問題点を分析して今後の授業改善について考察していきたい。

今回の造形用具の調査を考えた時、はさみ、のり、セロハンテープ、木工ボンドなど幼児の造形活動でよく使う基本的な道具からペンチ、のこぎり、金槌（かなづち）、錐（きり）、千枚通し（めうち）、ダンボールカッターなど使用する機会が少ない道具まで幅広く調査した。それは、多様な道具や知識を経験することで、今後の人生に役立つという意味でも幅広い知識は重要であり、保育者、幼児にとっても必要であると考え幅広い道具の使用について調査の項目を多様化した。

### (2) Y短期大学の現状

Y短期大学の造形分野の授業は多岐に渡り開設されている。造形や表現の授業の中で様々な素材

や材料を加工し、工夫することを通して子どもたちの表現を引き出す指導力を身に付け、自身の用具の知識や技能も高めていくことを目標に挙げている。

しかし、学生たちの入学時には用具経験が乏しいと授業上感じることもある。

例えば、授業の中で立体物（張り子人形）に穴を開けるため錐を使う場面では、錐を回転させずにただ押し穴を開けようとする学生がいた。また、千枚通し（めうち）を錐だと思って使ってきたという学生の言葉を聞いた。他、グルーガンの使い方、仕組みを全く知らない学生の姿が少なからず見られた。こうしたことから、高校卒業時までの経験の差が非常に大きいと予測される。よって、今の学生が、どの程度用具の知識があり、どの程度経験があるのかを明らかにしたいと思い、アンケート調査を行うこととした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査概要

調査対象

Y短期大学保育学科1・2年生

調査期間

2021年12月

調査内容

「質問紙調査」

以下のアンケート項目

[各道具] について

Q 知っていますか？また、使った経験がありますか？

1. 10回以上使った経験がある
2. 5回～9回程度使った経験がある
3. 1回、使った経験がある
4. 知っているが使った経験がない
5. 知らない、経験がない

Q 初めて使った時期はいつですか？

1. 就学前（0～6歳）
2. 小学生
3. 中学生
4. 高校生

### 5. 大学生

Q 幼児の活動に使いたいと思いますか？

1. はい
2. いいえ

「はい」と答えた人は、具体的にどのように使うかイメージができますか？できればここに記入してみてください。（自由記述）

### (2) 分析方法

- ・選択式質問に対する回答の単純集計及び自由記述の整理。
- ・自由記述に関して、同じ文言は省略あるいはまとめて記載する。

### (3) 倫理的配慮

アンケートは無記名及び提出時の無人BOX設置

## 3. 結果および考察

今回、調査対象とした造形用具は、以下の表1のとおりである。

表1 アンケート対象用具一覧

Q1 「はさみ」	Q11 「粘土用伸ばし棒」
Q2 「セロハンテープ」	Q12 「粘土等の型抜き」
Q3 「でんぶんのり」	Q13 「ペンチ」
Q4 「ホチキス」	Q14 「金槌（かなづち）」
Q5 「木工用ボンド」	Q15 「のこぎり」
Q6 「グルーガン」	Q16 「錐（きり）」
Q7 「水彩用具一式」	Q17 「千枚通し（めうち）」
Q8 「ローラー」	Q18 「サンドペーパー」
Q9 「版画用ばれん」	Q19 「ダンボールカッター」
Q10 「粘土ベラ」	Q20 「クランプ（万力）」

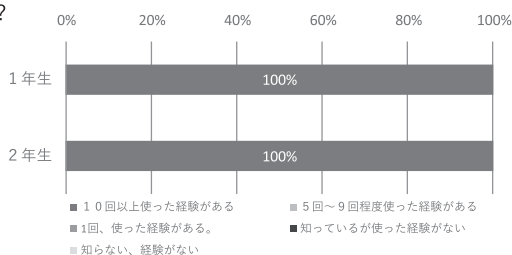
これらの用具のうち、今回はアンケート結果が特徴的だった道具6つをピックアップして考察していきたい。

表2 「はさみについてのアンケート結果」

Q1 「はさみ」について

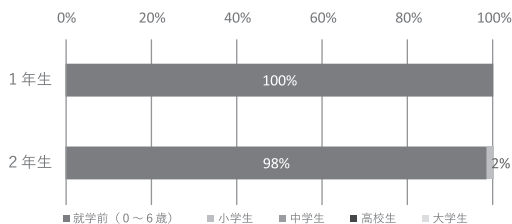
Q1-1 知っていますか？また、使った経験がありますか？

	1年生	2年生
10回以上使った経験がある	100%	100%
5回～9回程度使った経験がある	0%	0%
1回、使った経験がある	0%	0%
知っているが使った経験がない	0%	0%
知らない、経験がない	0%	0%
	100%	100%



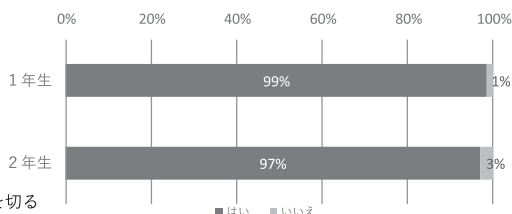
Q1-2 初めて使った時期はいつですか？

	1年生	2年生
就学前（0～6歳）	100%	98%
小学生	0%	2%
中学生	0%	0%
高校生	0%	0%
大学生	0%	0%
	100%	100%



Q1-3 幼児の活動に使いたいと思いますか？

	1年生	2年生
はい	99%	97%
いいえ	1%	3%
	100%	100%



「はい」と答えた人は、具体的な利用イメージ

- 大きな紙を自由に切り何かを作ったり、丸・三角など決まった形を切る
- 紙や画用紙や段ボールや紙コップを切り工作・造形・製作活動に使う
- 切絵遊び、紙に線や形を描いておき、それに沿って切る
- 指先を使って「ちょぎん」と言いながら切る
- 線の上などまっすぐに切る練習をしてから色々な形と作っていく
- 折り紙を切って、輪飾りなどの七夕の飾りを作る活動
- 5歳児で折り紙で雪の結晶を作ったり自分自身で物が作れるようにする
- 時計を作る活動で円や矢印の形にも切る
- 低年齢対象であれば線を引いて折り目を付けておいたものを切る作業
- 前期の授業でしたアメ玉の描画活動
- 紙が切れる楽しさ・不思議さ喜び味わう活動
- 紙を切り、みんなの物を集め虹を作る
- 指が発達してきた頃に紙に印やマークを付けていく活動
- 手先が器用になったり物を切る事で幅が広がる
- 折り紙を自由に切り「切る」を楽しむ活動
- 折り紙を細長く切ったり、ちぎれないように切る
- 紙を縦長に切る・保育士が形を描いたものをその形通りに切る・直線や曲線を切る
- 低年齢児には身近な道具の代表として使い方（持ち方・注意）を話しをする
- 太線などに沿って紙を回しながら切る
- 紙を細かく切る
- ちょぎんと短いものを一回で切る活動から始める
- 手指を使う運動としてよい
- 色々な体験をしてほしいから
- 年齢に合わせた遊び方をする

表2は「はさみ」についてのアンケート結果を示している。「はさみ」は身近な道具として利用頻度も高く、知識・利用経験・初めて使った時期（就学前）・幼児期への使用等についても、ほぼ100%の回答を示している。自由記述への記載は全ての道具の中でも最も多かった。特に、幼児の発達段階に合わせて道具を使用する際の具体的な活動イ

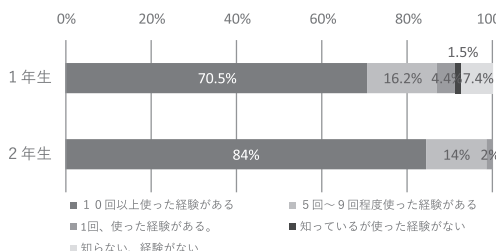
メージが記載されている。それは、初めてはさみを使うときの指導のことからはさみの上達を目指した指導方法、また、はさみを切ることを楽しむ活動・題材まで具体的な利用イメージが記載されている。1年次の学生もアンケートを行った12月の時期には、はさみの指導について学習済みであるため、しっかりと回答できていた。2年次の学

表3 「でんぶんのりについてのアンケート結果」

Q3 「でんぶんのり」について

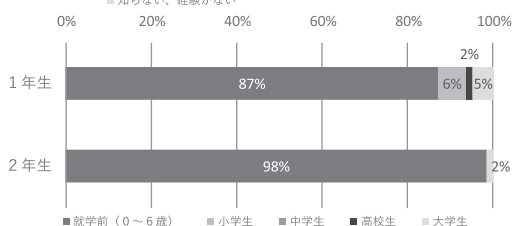
Q3-1 知っていますか？また、使った経験がありますか？

	1年生	2年生
10回以上使った経験がある	70.5%	84%
5回～9回程度使った経験がある	16.2%	14%
1回、使った経験がある	4.4%	2%
知っているが使った経験がない	1.5%	0%
知らない、経験がない	7.4%	0%
	100%	100%



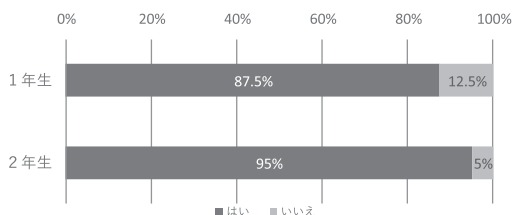
Q3-2 初めて使った時期はいつですか？

	1年生	2年生
就学前（0～6歳）	87%	98%
小学生	6%	0%
中学生	0%	0%
高校生	2%	0%
大学生	5%	2%
	100%	100%



Q3-3 幼児の活動に使いたいと思いますか？

	1年生	2年生
はい	87.5%	95%
いいえ	12.5%	5%
	100%	100%



「はい」と答えた人は、具体的な利用イメージ

紙同士を貼ったり、自由に好きなところに貼ってもら

早い時期から手を使って伸ばしたりのりの感触を味わう事も大事

貼り絵・ちぎり絵・画用紙に折り紙を貼る

指ですくってつける

大きな紙に紙を貼る、新聞紙や和紙にぬる

製作・造形活動に使う

台紙に制作物を貼り付ける

どのようにしたら上手にくっつけられるか

舐めても大丈夫

幼児は使いやすいと思うから

七夕飾りや輪飾りを作る時

一人一人用いて使う

自分で使いたい適量を考え紙に貼る（どのくらい使用すればよいか理解）

生は授業や実習で設定保育を十分に行ってきたため、将来、保育現場で行ってみたい造形活動が記載されていた。

表3は「でんぷんのみ」についてのアンケート結果を示している。でんぷんのみは、セロハンテープと並び非常にメジャーな接着用具のひとつと

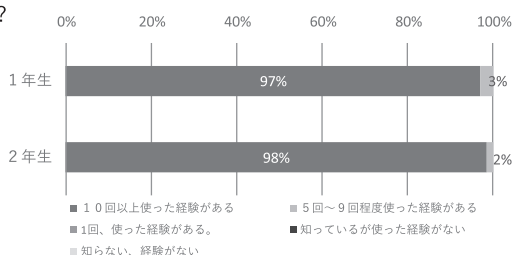
考えていたが、回答を見ると使用経験10回未満の学生が1年生28%、2年生16%となっており、かなりの数の学生の経験が乏しいと言える。1年生には、使用したことが無いという学生も8%いる。また、初めて使用した時期が高校生、大学生という回答もあり、体験の差が見られる。確かに保育現場においても、近年「スティックのみ」を活用

表4 「ホチキスについてのアンケート結果」

Q4 「ホチキス」について

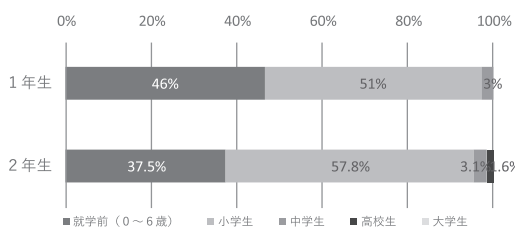
Q4-1 知っていますか？また、使った経験がありますか？

	1年生	2年生
10回以上使った経験がある	97%	98%
5回～9回程度使った経験がある	3%	2%
1回、使った経験がある	0%	0%
知っているが使った経験がない	0%	0%
知らない、経験がない	0%	0%
	100%	100%



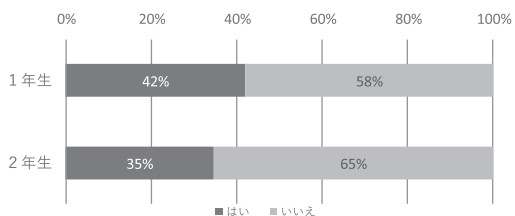
Q4-2 初めて使った時期はいつですか？

	1年生	2年生
就学前（0～6歳）	46%	37.5%
小学生	51%	57.8%
中学生	3%	3.1%
高校生	0%	1.6%
大学生	0%	0.0%
	100%	100.0%



Q4-3 幼児の活動に使いたいと思いますか？

	1年生	2年生
はい	42%	35%
いいえ	58%	65%
	100%	100%



「はい」と答えた人は、具体的な利用イメージ

一人で使わせるのではなく大人と一緒にする

複数の紙をまとめる事ができるし、紙パックをとめる

物と物をくっつける、止める

ホチキスを押す感覚を覚える

ホチキスを星に見立てて使う

飾り作り、ホチキスを好きなところにして遊ぶ

まとまりにくいもの分厚いもの硬いものをとめる

使うだけで楽しめる

音と感覚を楽しむ

就学前にホチキスを使い色々なものをとめる活動

針金がついているので、握力がついてきた高学年になったら使いたい

昔に比べ使いやすい用具になったと思います

小さいな接着部分でもしっかりとくっつけれる

王冠作り

しているところもあり、今後、幼児期に経験していない子どもが増えることも想像できる。しかし、人間にとって最も身近な道具でもある手を使い、自分の思う範囲や思う厚みを視覚や触感覚を頼りに強く触れる、優しく触れるなど強弱のコントロールをしながら塗り付けていく経験は、他の道具を使用するときにも生かされる手指の巧緻性につながることは考えられる。

一方で、感覚過敏等により手指が汚れるのを嫌がる子どもがいることも考えられるため、選択肢は設けておく必要もある。

表4は「ホチキス」についてのアンケート結果を示している。ホチキスは、接着・接続のための文房具である。セロハンテープやのりとは違った手軽さで、物と物をつなぐことが出来る。この道具については、初めて使った時期が就学前よりも

小学生の時期の方が上回っている（1年生54%、2年生57.8%）ことがわかった。そういった自分自身の経験が、幼児の活動での使用には消極的な回答につながっていることが考えられる。

筆者の一人が、保育現場の研修において年長児でのホチキス遊びを提案した際も、当初は「危ないのでは?」「遊びに使う発想が無かった」「握力は?」等の理由から、疑問の声が上がった。しかし、実際に使用してみると、子どもたちはルールを守りながらも自分なりにイメージを膨らませ、様々にホチキスを扱い、保育者が驚くような工夫や遊び方を生み出す姿が見られた。ホチキスは幼児の造形的な遊びを扱う書籍等でも採り上げられており、文房具としても一般的なものである一方で、個人の経験によって、遊びの道具として扱うという発想にはなかなか結び付いていかないことが想像される。

表5 「金槌（かなづち）についてのアンケート結果」

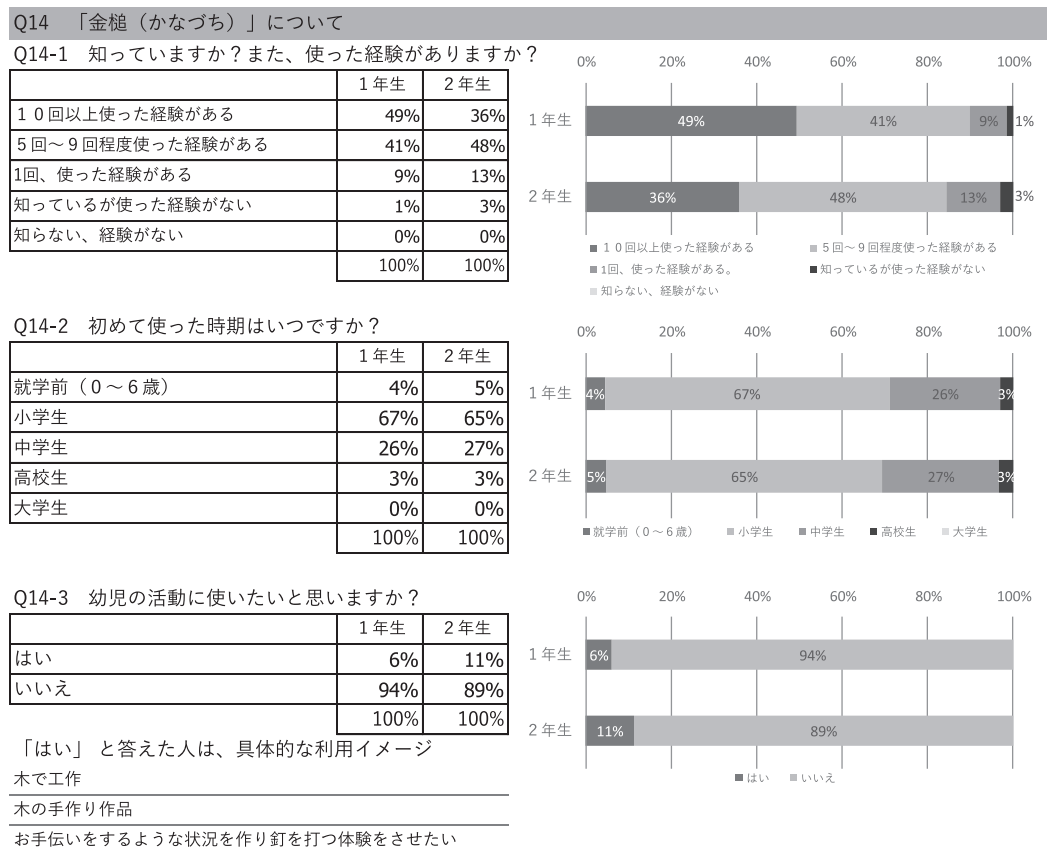


表5は「金槌（かなづち）」についてのアンケート結果を示している。初めて使った時期については66%程度の学生が小学生の時に経験しているが、中学生の時に初めて使用したと回答する学生も26%程度いることが分かった。また、10回以上の経験があると回答した学生は1年生が49%、2年生36%であった。学校や家庭生活での取り組みの差が大きいと考えられる。就学前の経験は非常に少

ない（1年生4%、2年生5%）。そういった自分自身の経験が、幼児の活動での使用には消極的な回答につながっていると考えられる。

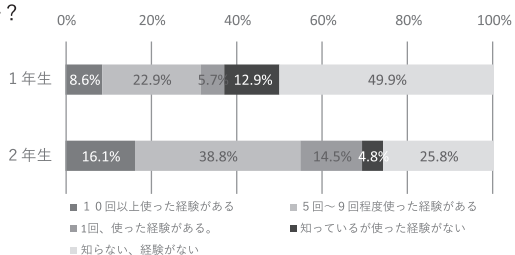
金槌は基本的には釘を打つ道具として使用することが多いが、粘土の塊を砕いたりするときにも使用する。こうした物をたたいたりする使い方を自由記述に記載する学生はいなかった。

表6 「千枚通し（めうち）についてのアンケート結果」

Q17 「千枚通し（めうち）」について

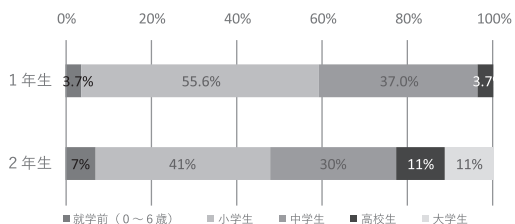
Q17-1 知っていますか？また、使った経験がありますか？

	1年生	2年生
10回以上使った経験がある	8.6%	16.1%
5回～9回程度使った経験がある	22.9%	38.8%
1回、使った経験がある	5.7%	14.5%
知っているが使った経験がない	12.9%	4.8%
知らない、経験がない	49.9%	25.8%
	100%	100%



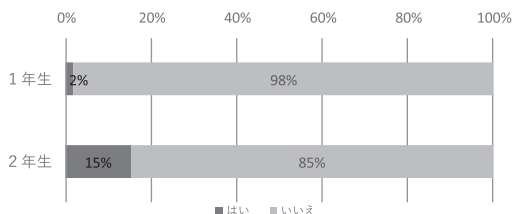
Q17-2 初めて使った時期はいつですか？

	1年生	2年生
就学前（0～6歳）	3.7%	7%
小学生	55.6%	41%
中学生	37.0%	30%
高校生	3.7%	11%
大学生	0.0%	11%
	100%	100%



Q17-3 幼児の活動に使用したいと思いますか？

	1年生	2年生
はい	2%	15%
いいえ	98%	85%
	100%	100%



「はい」と答えた人は、具体的な利用イメージ  
穴をあけるのにとても便利なので小型の物なら園児でも使えそう  
ひもを通す為の穴を自分で開ける作業  
紙コップの底に穴を開けてもらう

表6は「千枚通し（めうち）」についてのアンケート結果を示している。千枚通しとめうち（目打ち）は様々な形状、太さがあり全く同じ道具ではないが、錐（きり）との違いは先が円錐状に尖っている。千枚通し（めうち）の経験がないと回答している学生は1年生に多く見られ（50%）、2年

生でも大学で初めて使ったと答えた割合は11%であった。

幼児の活動に使用したいと答えた1年生は2%であるが、2年生は15%であり、上昇している。幼児の活動イメージの記載でもわかるように、この道具を使って穴を開けるための便利な道具である



と回答している。

同じ穴を開ける道具でもう少し危険性がない「カルコ」という道具がある。カルコは千枚通し（めうち）に比べて針の長さ、本体ともに短く幼児の手になじみやすい<sup>2)</sup>と紹介されている。本学でも

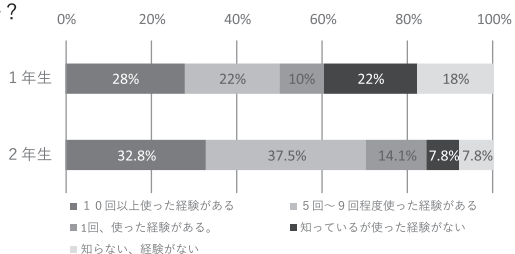
2年生はカルコの使い方やカルコを使った活動について学習している。その他にも穴を開ける道具として竹串などもあるので、穴を開ける材料や用途をしっかりと考慮して千枚通し（めうち）を取り上げていかなければならないことを改めて感じた。

表7 「ダンボールカッターについてのアンケート結果」

Q19 「ダンボールカッター」について

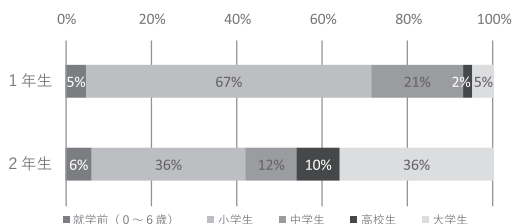
Q19-1 知っていますか？また、使った経験がありますか？

	1年生	2年生
10回以上使った経験がある	28%	32.8%
5回～9回程度使った経験がある	22%	37.5%
1回、使った経験がある	10%	14.1%
知っているが使った経験がない	22%	7.8%
知らない、経験がない	18%	7.8%
	100%	100.0%



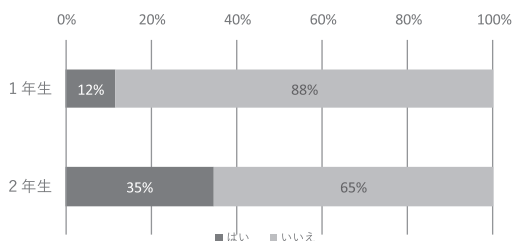
Q19-2 初めて使った時期はいつですか？

	1年生	2年生
就学前（0～6歳）	5%	6%
小学生	67%	36%
中学生	21%	12%
高校生	2%	10%
大学生	5%	36%
	100%	100%



Q19-3 幼児の活動に使いたいと思いますか？

	1年生	2年生
はい	12%	35%
いいえ	88%	65%
	100%	100%



「はい」と答えた人は、具体的な利用イメージ  
段ボールで大きいものを製作（家作り・お店屋さんごっこ）

表7は「ダンボールカッター」についてのアンケート結果を示している。ダンボールカッターは、のこぎりのように前後にスライドさせながら、厚みのあるダンボールを切る道具である。これについても回答を見ると経験の差が非常に大きい。

初めて使った時期についての質問では、大学生と回答した割合は全ての質問の中で最も高い。特に、2年生は36%と高い。幼児の活動に使いたいと答えた1年生の学生は12%であるが、2年生の学生は35%であり、上昇している。これは、養成

校入学後に授業内で経験したことを踏まえ、実際に保育での活用をイメージできる学生が増えたと考えられる。一方で、使いたいとは思わない学生の割合が大きいことも明らかである。その理由について、今回の調査では明らかに出来ないが、怪我につながる恐れを考慮している可能性はある。

しかし、実際に筆者の一人が保育現場での研修で年長児を対象としてダンボールカッターを使用した保育実践を行った際には、20人以上の子ども



たちが活動する中で、大きな怪我はなかった。外遊びでかけっこをして遊びまわる際の怪我のリスクと比べても、大きな危険を伴うとは言えないのではない。

幼児の活動に使いたいという学生の具体的なイメージについては「大きいものを制作」という記述があった。ダンボールを使った家作りなど、何か具体物を作るというイメージは、授業内容を通しての自らの経験によるものであろう。このことは、養成校での授業内容を反省的に振り返る必要がある。用具を使い、最初から具体的なものを作ることを目指すとすると、子ども個々の経験や発達によって大きな差が生まれる。それが「大きいもの」であったならば、怪我のリスクが高まることも考えられる。まずは小さなダンボール箱やダンボール板を切り刻んでみたり、突き刺してみたりなど、子どもなりに思い思いに道具に慣れ親しんで遊びながら、徐々に、切り刻んだ細かいダンボールで何か違う遊びが広がったり、切ったものが何かの形に見立てられたりなどしながら、子ども自ら遊びを展開していくという発想が、授業の中で育まれていないことの表れかもしれない。養成校教員としては、保育者が、子どもの遊びをサポートするために道具や材料を用いるという視点を授業の中でより意識する必要もある。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、Y短期大学保育学科1・2年生に造形用具の知識がどのくらいあるか、そして経験がどれくらいあるか、また、初めて使った時期と幼児の活動に使いたいのか、についてアンケート調査を行った。結果として、造形用具の中でもベンチ、のこぎり、金槌（かなづち）、錐（きり）、千枚通し（めうち）、ダンボールカッターなどの道具は経験が少ないことが分かった。クランプ（万力）に関しては、今回の造形用具のアンケート中、初めて経験した時期の差が最も大きいことが分かった。グルーガンに関しては、入学前に大半の学生が経験していたが、数名、養成校入学後に初めて使用した学生もいた。経験があっても、知識が少ない為、幼児の活動に使うことは消極的であることが分かった。

一方で、版画用ばれん、粘土ペラなどの道具に関しては幼児の活動に使いたいとの回答が思った以上に多く見られた。これは、Y短期大学の

造形の授業が幅広く展開されていることの現れであろう。造形の授業では版画用インクの使用や、ローラーの種類も豊富にそろえて授業が行われている。また、地域で採掘された土粘土での授業実践にも取り組んできた。実際の素材や道具を扱う経験があつてこそ保育の現場でしてみようという意欲につながるはずだ。版画用ばれんと粘土用伸ばし棒の道具アンケートを見ると、1年生よりも2年生の方がより道具の理解と興味関心が強い。これらは、授業内で使用した道具でもあり、そういった経験から道具に関する理解や関心の強さにつながっているものと推測される。Y短期大学が幅広い授業に取り組んできたからこそだと考える。

今回の調査で経験が少なかったベンチ、のこぎり、金槌（かなづち）、錐（きり）などの造形用具は、幼児にとって怪我のリスクがあることが原因で敬遠されがちな道具であることは確かだ。しかし、保育現場では幼児の活動として金槌（かなづち）を使って釘打ちを取り入れているところも実際にある。そうした園で働く上である程度の経験と知識がなければ、安全面においても適切な指導はできないと考える。また、そういった園でなくても、保育者の経験知の違いによって子どもの経験の幅に影響を与えることもあろう。保育・幼児教育は環境を通して行うものであり、保育者は、子どもにとっての重要な人的環境であるからである。

よって、今後のY短期大学の造形関係の授業を考える上で、できるだけ幅広く道具の紹介を丁寧に行う事と同時に、幼児の活動に使用するときの安全面や個に応じた適切な指導に配慮するよう指導していきたい。また、今回詳しく取り上げられなかった道具の調査結果についても、引き続き詳細に考察し、その必要性を精査しつつ、今後の授業改善につなげていきたい。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2 - (3) 環境を通して行う教育の特質 (2018)

#### 参考文献

- 1) 花篤實・岡田愨吾、『新造形表現 理論・実践編』、三晃書房 (2009)
- 2) 今野道裕、『作ってあそべる製作ずかん』、学研教育出版、(2013)

- 3) デイビッド・エプスタイン、『RANGE（レンジ）知識の「幅」が最強の武器になるタイトル』、日経BP、(2003)
- 4) 文部科学省、「幼稚園教育要領解説」、(2018)
- 5) 厚生労働省、「保育所保育指針解説」、(2018)
- 6) 内閣府、文部科学省、厚生労働省、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」、(2018)